

教育研究業績書

2017年10月20日

所属：看護学科

資格：助教（臨床）

氏名：岩崎 幸恵

| | |
|--------------|-------------------------|
| 研究分野 | 研究内容のキーワード |
| 老年看護学, 基礎看護学 | 高齢者, 皮膚, 褥瘡, 褥瘡予防, 看護技術 |
| 学位 | 最終学歴 |
| 看護学修士 | 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|--------------|-----|----|
| 事項 | 年月日 | 概要 |

| | | |
|----------------------|------------------|--|
| 1 教育方法の実践例 | | |
| 1. 国家試験などにも関連させた授業展開 | 2016年4月1日現在 | 授業テーマに関連のある国家試験問題を授業中に回答させた。その方法として、大学が契約しているweb教材を活用した。この方法は授業中だけでなく、その他の時間にも活用できるよう提案することで、授業内容の復習と共に国家試験対策にもなり学力向上に貢献できると考える。 |
| 2. 看護学実習における学生指導の工夫 | 2012年4月から2016年3月 | 学生の受け持ち患者は高齢者が多く、実習病棟は脳神経外科、神経内科、呼吸器外科、呼吸器内科、総合内科であったため、脳血管疾患や、パーキンソン病等の神経疾患、肺癌、慢性閉塞性肺疾患等の対象者の看護の学生指導を行った。また、脳血管疾患後のリハビリテーション、化学療法、放射線療法、緩和ケア等についても、学生が理解しやすいような指導を工夫した。 |

| | | |
|---------------------|--|--|
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| | | |

| | | |
|---|-----------------------|--|
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 1. 大阪南医療センター ケーススタディ講師 | 2013年9月から2014年2月 | 大阪南医療センター2年目看護師を対象に、ケーススタディの指導を行った。2014年2月には発表会にも参加し、講評を行った。 |
| 2. 学習効果を高めるための体験型学習の導入、レポート課題を活用 | 2013年4月1日から2016年3月31日 | 基礎看護技術学の担当授業内にて、テキスト教材に加え、実際に臨床現場で用いられている物品などを紹介し、初学者である学生に対し、より臨床現場がイメージできるように体験型学習を取り入れた。それらに加え、授業後にレポート課題を提示し、フィードバックを行うことで、学習効果を高める工夫を行った。 |
| 3. 大阪大学医学部附属病院 消化器内科、東11階病棟 看護師 | 2007年4月から2012年3月 | 消化器内科全般であったため、若年から高齢者まで幅広い年齢層が対象となっていた。このため、発達段階や加齢に伴う変化などに関しては色々な視点から学ぶことができた。その中でも、高齢者が多く、悪性腫瘍や癌に対しての治療を積極的に行う病棟であったため、放射線療法や化学療法、緩和ケアやターミナル期の看護に関しては、積極的に実践してきた。特に緩和ケアは、他職種とも連携しながら関わる事ができ、大変勉強になった。地域連携に関しては、保健福祉ネットワーク部とも協力し、他の病棟よりもコンサルテーション数に関して高して実績もある中で、学んできた。多かった疾患名は、肝臓がん、すい臓がん、胃がん、食道がん、大腸がん、炎症性腸疾患等であった。 |
| 4. 岡山県岡山市 株式会社 メッセージ 有料老人ホームアミーユ（勤務地弁天町 難波稲荷 天下茶屋）看護師 | 2005年8月から2006年11月 | 株式会社が運営する施設での勤務では、特に接遇などの面で、入所者目線に力を入れたサービスの提供を行った。様々な経営母体の施設に勤務することにより、提供するサービスの視点の違いや、入所者及びその家族のニーズの多様さを感じる事ができた。病院での勤務と違い、医師も常駐せず、入所する高齢者全員の健康管理や急変時の対応など、施設で勤務する看護師の責務などについても学ぶ事ができた。 |
| 5. 岡山県高梁市 医療法人 清梁会 高梁中央病院 療養型病棟 看護師 | 2004年6月から2004年11月 | 地域性の高い療養型病棟での勤務で、患者とその家族に対し、看護を提供してきた。入院期間も長期にわたるため、家族との関わりの重要性を再認識できた。疾患に対しての看護も必要であったが、特に食事や入浴、リハビリテーション、胃瘻のケアなどの日常生活援助や、歌、手芸などのレクリエーションの企画・実施も行った。 |
| 6. 大阪府大阪市 社会福祉法人 四天王寺福祉事業団 特別養護老人ホーム 四天王寺きたやま苑 准看護師 | 2001年10月から2002年3月 | 特別養護老人ホームでの勤務で、老年看護学分野への興味を持つきっかけとなった。主に、入所者の健康管理や治療・処置の介助に加え、介護職が行うケアなどにも積極的に参加し、情報提供や、褥瘡予防についての知識の提供なども行い、他職種連携にも積極的に取り組んだ。看護・介護度の高い高齢者との関わりが多く、褥瘡予防という現在の自身の研究テーマへの動機付けにもなり、非常に良い経験となった。デイサービス部門でも勤務することもあり、寝たきりや認知症の対象者から自立している高齢者まで、幅広く関わる事ができた。 |

| | | |
|--------------|--|--|
| 4 その他 | | |
| | | |

| 教育上の能力に関する事項 | | | | |
|--|------------------|---|---|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 | | |
| 4 その他 | | | | |
| | | | | |
| 職務上の実績に関する事項 | | | | |
| 事項 | 年月日 | 概要 | | |
| 1 資格、免許 | | | | |
| 1. 保健師免許 | 2014年3月13日 | 登録番号：第224643号 | | |
| 2. 看護師免許 | 2004年6月24日 | 登録番号：第1292931号 | | |
| 3. 准看護師免許 | 2001年3月15日 | 登録番号：第59827号 | | |
| 2 特許等 | | | | |
| | | | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | | | |
| 1. 大阪大学医学部附属病院臨床実習指導者 | 2011年4月から2012年3月 | 大阪大学医学部保健学科3回生及び4回生の成人看護学実習を受け入れ、指導を行った。コミュニケーション方法などに関するロールプレイを企画し、理解を深める指導を行った。 | | |
| 4 その他 | | | | |
| | | | | |
| 研究業績等に関する事項 | | | | |
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| | | | | |
| 2 学位論文 | | | | |
| 1. 高齢者の体型の違いからみた頭部挙上30度における臀裂部圧迫状況（修士論文） | 単 | 2007年3月 | 大阪大学大学院医学系研究科 | シルバー人材センターに登録する高齢者を対象に、肥満体型、標準体型、やせ体型の3群に分け、頭部挙上30度の体位をとり、臀部血流及び体圧を経時的に測定した。体型別に考察を行った結果、各群に特徴的な血流及び体圧変動があることが示唆された。 |
| 3 学術論文 | | | | |
| 1. The Direction of Research on Active Aging and Healthy Life Expectancy in Japan（日本におけるアクティブエイジングと健康寿命研究の方向性）（査読つき） | 共 | 2014年4月 | Open Journal of Nursing, http://www.scirp.org/journal/ojn/ | 日本では、2025年には団塊の世代と呼ばれる全国民の18.1%の人口が後期高齢者となるため、それを支える基盤づくりが必要である。そこで、本研究ではアクティブエイジングという側面から文献検索を行い、日本における取り組みや研究の動向を明確化し、次の研究課題を検討することを目的とした。「アクティブエイジング」と「健康寿命」の検索結果を合わせて、原著120件、総説・解説・特集213件をそれぞれ分析対象とし、全ての論文のabstractについて、テキストマイニングの手法を用いて分析を行った。その結果、原著論文からは【保健統計】、【性別】、【年齢】、【疾患】等の8カテゴリが抽出された。総説・解説・特集からは【方向性】、【疾患】、【生活】等の16カテゴリが抽出された。いずれにおいても【看護】というカテゴリは抽出されなかった。原著論文で取り扱われている疾患は、脳血管疾患と骨粗鬆症であり、これは寝たきりやQOLの低下につながりやすいことから、「アクティブエイジング」、「健康寿命」という側面では研究が多いことが考えられた。総説・解説・特集からは、疾患としては生活習慣病と更年期が抽出された。原著論文とのカテゴリの違いは、日本の研究者が国内で原著として発表せずに国外で発表している可能性が考えられた。今回の研究を行うことで、日本においては「アクティブエイジング」という用語を用いた研究がほとんど行われていないことが明らかとなった。2025年を迎えるためには、更に「アクティブエイジング」、「健康寿命」という視点での研究数を増やしていく必要があると考えられた。 本人担当部分：分析方法の検討、データ分析を担当。 (担当頁特定不可能) |
| 2. 皮膚血液循環評価装置の開発とその臨床応用（査読付き） | 共 | 2010年5月 | バイオメカニズム学会誌34(2), p.132-141 | 褥瘡の発生予測を早期に行うために、非侵襲的な血液循環評価装置の試作開発を行い、局所皮膚領域生体熱移動モデルにより皮膚の温度伝導率を推定する手法を開発した。実証実験により、温度伝導率と血流量との間に線形相関があることを明らかにし、温度伝導率が褥瘡発生リスク要因とも関連性のあることが示唆された。本試作装置を使用した温度伝導率を用いることにより局所の皮膚血液循環状態を評価できる可能性が明らかとなった。 本人担当部分：データ収集補助 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|--|---------|-----------|--------------------------------|--|
| 3 学術論文 | | | | |
| 3. ADLの維持と褥瘡予防を両立させるための体圧分散マットレスの評価—マットレス上での起き上がり動作時の沈み込み、筋活動量、動きやすさの観点から—（査読付き） | 共 | 2007年10月 | 日本褥瘡学会誌, 9(1), p. 81-86 | <p>共著者名：羽賀知行、伊部亜希、阿曾洋子、宮嶋正子、石澤美保子、高田（岩崎）幸恵、田丸朋子、本多容子</p> <p>起き上がり動作時の身体の沈み込み、筋活動量、主観を分析した。汎用マットレス、ウレタンマットレスとエアマットレスを比較した結果、起き上がり動作時の沈み込みはエアマットレスが最も大きく、筋活動量は汎用マットレスが大きかった。身体が沈み込みすぎないマットレスが動きやすいと評価された。ベッド上での自力動作が可能な場合は、沈み込みが小さく軟らかすぎないウレタンフォームマットレスの使用が望ましいと考えられた。</p> <p>本人担当部分：データ収集補助</p> |
| 4. 体圧分散マットレスの安楽性と安全性の評価—寝心地と端坐位保持中の身体安定性—（査読付き） | 共 | 2006年3月 | 看護人間工学研究誌, 7, p. 29-35 | <p>共著者名：岡みゆき、阿曾洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵、高田（岩崎）幸恵</p> <p>体圧分散能力の異なる4種類のマットレス（汎用マットレス、枠無ウレタン、枠有ウレタン、エアマットレス）について、寝心地と身体安定性の評価を行った。その結果、厚みが薄めでマットレスの外縁を高密度ウレタンフォームで囲まれている枠有ウレタンが寝心地の評価が高く、汎用マットレスと同様の安全性であることが明らかとなった。褥瘡予防だけでなく安全性を考慮したマットレスを選択するための基礎資料が得られた。</p> <p>本人担当部分：データ収集補助</p> <p>共著者名：岡みゆき、阿曾洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵、高田（岩崎）幸恵、前田知穂</p> |
| その他 | | | | |
| 1. 学会ゲストスピーカー | | | | |
| 2. 学会発表 | | | | |
| 1. 地域在住独居高齢者の生活パターンおよび心身の状況の実態 | 共 | 2017年6月 | 日本老年看護学会第22回学術集会（愛知県） | <p>独居高齢者の生活パターンやそれに伴う心身の状況を正確に経時的に把握する事を目的に独居高齢者を対象に自宅でのバーコード読み取り機器を使用した調査を各自約2週間ずつ行った。その結果、本研究の対象者は地域の中でも活動的・意欲的な高齢者であり外出頻度も高く、独居であっても殆どが自立し規則正しい生活を送っていることがあきらかとなった。頻度は少なかったが身体の不調からくるネガティブ感情の表出がみられたことからそれらを早期に把握できるシステム構築が必要であると考えられた。</p> <p>本人の担当部分：調査補助</p> <p>発表者：杉浦圭子、横島啓子、久山かおる、岩崎幸恵</p> |
| 2. スライディングシート使用の有無によるベッド上での上方移動における介助者の腰部・頸肩部負担の有無 | 共 | 2016年10月 | 日本看護技術学会第15回学術集会（群馬県） | <p>ベッド上仰臥位の被介助者の上方移動を介助する際にシートを使用する方法としない方法での介助者の腰部・頸肩部の負担や負担感を比較し検討する事を目的に看護学生に対して左右脊柱起立筋の筋電図を測定した。その結果、ベッド上仰臥位の上方移動に関してはシート不使用の方が負担と負担感が大きかった。ただし、シート使用の場合、シートを敷きこんだり広げたりする動作での負担軽減についても今後検討していく必要性が示唆された。</p> <p>本人の担当部分：実験補助、実験指導、分析指導</p> <p>発表者：入江星香、福田光、福田礼、生田歩由香、杉本吉恵、岩崎幸恵、中岡亜希子</p> |
| 3. ストレス対処型別による好みの精油を用いた芳香浴のリラクゼーション効果による検討 | 共 | 2015年10月 | 日本看護技術学会第14回学術集会（愛媛県）講演抄録集p108 | <p>好みの精油を用いた芳香浴によるリラクゼーション効果について対象者のストレス対処型別に比較することを目的とし健康な看護学生に対し芳香浴と芳香浴なしの両方を同一の対象者に実施する準実験研究を実施した。ストレス対処型をストレス自己評価尺度により、問題焦点型、情動焦点型、回避・逃避型に分類し分析を行った結果、情動焦点型の対象者のみで実験開始時より芳香浴後のほうが有意にくつろいだ気分を示す値が増加していた。これらのことより情動焦点型の対象者では他の対象者に比べ芳香浴後に副交感神経活動が優位な時に出現しやすいα波含有率が有意に増加し、リラクゼーション効果が得られやすくリラクゼーション効果を得ることを目的とした芳香浴を実施する際には個人のストレス対処型により効果に差異を生じる可能性が示唆された。</p> <p>本人の担当部分：分析指導</p> <p>発表者：岡村香織、渋川萌美、山口舞子、中岡亜希子、杉本吉恵、岩崎幸恵</p> |
| 4. 仰臥位から側臥位への体位変換に | 共 | 2015年10月 | 日本看護技術学会第14 | 仰臥位から側臥位へ体位変換をする際にシートを使 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・ 共著書別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称 | 概要 |
|---|-------------|---------------|---|---|
| 2. 学会発表 | | | | |
| おける介助者の腰部負担ースライ ディングシートを用いてー | | | 回学術集会 (愛媛県) 講演抄録集p126 | 用する方法としない方法での介助者の腰部負担を 検討する事を目的とし、看護学生に対し左右脊柱起 立筋の筋電図を測定した。その結果、腰部負担や腰部 負担感はシート使用の方が不使用よりも軽減されて いることが示唆された。シート使用は介助者の腰部 負担軽減につながると考えられる。 本人の担当部分：実験指導 発表者：横山由佳梨、石橋 鼓、渡辺歩美、杉本吉 恵、伊藤良子、山口舞子、中岡亜希子、岩崎幸恵 |
| 5. 冷却刺激がもたらす皮膚組織温度 伝導と皮膚表在血流との関連 | 共 | 2008年8月 | 第10回日本褥瘡学会学 術集会(神戸市) | 冷却刺激による皮膚組織の温度伝導率を推定が皮膚 血流の評価指標となりうるかを検討した。健康高齢 者を対象とし、血流が増加した際に温度伝導率も大 きくなり、血流量と温度伝導率に正の相関があるこ とを確認した。このことより、温度伝導率が血流評 価の指標となりうるということが示唆された。 本人担当部分：データ収集補助 発表者名：伊部亜希、阿曾洋子、羽賀知行、宮嶋正 子、石澤美保子、高田 (岩崎) 幸恵 |
| 6. 皮膚組織血液循環評価装置の開発 | 共 | 2008年10月 | バイオメカニズム (東 広島) 学術講演会予稿 集第29回p. 213-216 | 血流が熱移動の調節に主導的な役割を果たしている との生理学的な前提で、皮膚組織の温度伝導率に着 目し、冷却刺激を用いた皮膚組織温度伝導率の推定 により皮膚組織血液循環を評価する装置を開発した 。温度伝導率と血流量との相関関係と、健康高齢者 に比べて長期臥床高齢者の温度伝導率が低い結果か ら、温度伝導率による皮膚組織血液循環評価の妥当 性が確認された。このことから、新たな評価機器へ の応用の可能性が示唆された。 本人担当部分：データ収集補助 発表者名：伊部亜希、阿曾洋子、羽賀知行、宮嶋正 子、石澤美保子、高田 (岩崎) 幸恵 |
| 7. 高齢者クラブにおける世代間交流 事業の実態と子どもの印象からみ た事業継続要因の分析 | 共 | 2007年6月 | 第49回老年社会科学会 大会(札幌市) | 高齢者クラブの世代間交流事業の実態を明らかにし 、実施の有無と事業実態や評価、子どもの印象との 関連を分析することで世代間交流事業の継続要因を 検討することを目的とし、調査を行った。世代間交 流事業の継続の有がより企画・運営への関わりが多 く、事業評価も高い結果から、コーディネーターの 存在や高齢者が企画から関わられる配慮が必要であ ることが課題として挙げられた。 本人担当部分：データ収集補助 発表者名：前田知穂、阿曾洋子、高田 (岩崎) 幸恵 、伊部亜希、片山恵、岡みゆき、徳重あつ子 |
| 8. 仰臥位からシムス位への体位変換 による消化管活動の実態 | 共 | 2007年3月 | 日本人間工学会 看護 人間工学会部 第15回 システム大会(八王子市) | 仰臥位からシムス位への体位変換が排便を促す看護 援助になり得るかどうかの示唆を得るため、2名の健 康女性を対象に実験を行った。いずれの被験者とも シムス位でのパワー値が増加し、便秘と判断された 被験者において、腸蠕動音のパワー値が大幅に増加 したことは、シムス位への体位変換による腸蠕動活 動の変化には、自律神経系の影響は少なく、機械的 な刺激の影響が大きいのではないかとということが考 えられた。 本人担当部分：データ収集補助 発表者名：片山恵、阿曾洋子、伊部亜希、徳重あつ 子、岡みゆき、高田 (岩崎) 幸恵、前田知穂 |
| 9. .高齢者の体型の違いからみた仙 骨部及び臀裂部圧迫状況 | 共 | 2007年3月 | 日本人間工学会 看護 人間工学会部 第15回 システム大会(八王子市) | 女性高齢者を対象に、一般的な褥瘡予防の一つとし て実施されている頭部挙上30度による体位が体型に より仙骨部及び臀裂部の血流に どのような影響を及ぼしているのかを知る事を目的 とし、血流測定を行った。その結果、臀裂部におい ても仙骨部同様、血流阻害を起ささない為の体位の 工夫や圧迫予防用具の必要性が示唆された。特に体 位変換後の圧迫緩和の必要性が示唆された。 本人担当部分：データ収集、分析、発表 発表者名：高田 (岩崎) 幸恵、阿曾洋子、伊部亜希 、片山 恵、宮嶋正子、徳重あつ子、岡 みゆき、 前田知穂、木下慈子 |
| 10. 健康な高齢者におけるベッド上坐 位姿勢の角度の違いによる自律神 経活動の比較 | 共 | 2007年3月 | 日本人間工学会 看護 人間工学会部 第15回 システム大会(八王子市) | ギャッチベッドを用いた坐位姿勢に着目し、健康高 齢者を対象に、仰臥位から坐位へ姿勢を変化させた 時の自律神経活動をヘッドアップ角度毎に評価し、 生体に与える影響の検討を行った。HR、%LF、HFの 変化は緩徐であり、また外的刺激の認識も鈍化して いることから、日常生活に問題のない高齢者におい ても、加齢による機能低下の存在が推測された。こ のことから、機能維持のための積極的な働きかけの 必要性が示唆された。 本人担当部分：データ収集補助 発表者名：徳重あつ子、阿曾洋子、伊部亜希、岡み ゆき、片山恵、高田 (岩崎) 幸恵、前田知穂、木下 慈子 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|-----------|---------------------------|--|
| 2. 学会発表 | | | | |
| 11. 体型の違いからみた頭部挙上30度における仙骨部・臀裂部血流量への影響 | 共 | 2006年8月 | 第14回看護人間工学部会研究会(栃木) | 成人女性を対象に、頭部挙上30度の体位を2時間持続した時の仙骨部及び臀裂部の血流量が体型の違いでどのように変化するかを検討した。その結果、体型の違いによって仙骨部及び臀裂部の血流量が変化する傾向にあることが示唆された 本人担当部分：データ収集及び分析、発表 発表者名：高田(岩崎)幸恵、阿曾洋子、前田知穂、伊部亜希、宮嶋正子、片山恵、岡みゆき、徳重あつ子、木下慈子 |
| 12. 体圧分散マットレスの体圧分散能力と一対比較 | 共 | 2006年3月 | 日本人間工学会 第14回システム連合大会(東京都) | 標準マットレスに比較すると体圧分散マットレスは起き上がり時の肘の沈み込みが大きくなるが、肩腰のひねり角度や体幹屈曲角度には違いはみられなかった。これらのことから、筋負荷も考慮した起き上がり動作の分析が必要であることが明らかとなった。 本人担当部分：データ収集補助 発表者名：岡みゆき、阿曾洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵、高田(岩崎)幸恵、前田知穂、矢野祐美子 |
| 13. 仰臥位から坐位への姿勢変化が生体に及ぼす影響—自律神経活動指標と左前頭葉局所Hb値の検討から— | 共 | 2006年3月 | 日本人間工学会 第14回システム連合大会(東京都) | 健康成人を対象に、仰臥位から坐位への姿勢変化による脳活性を脳波で捉えることを試みた。仰臥位と比較し、30度坐位は違いはなかったが、80度坐位ではβ帯域、γ帯域の増加がみられ、主観調査でも覚醒度の高さを感じていた。 本人担当部分：データ収集補助 発表者名：徳重あつ子、阿曾洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵、高田(岩崎)幸恵、前田知穂、矢野祐美子 |
| 14. 体圧分散マットレスにおける端坐位保持中の身体安定性の評価 | 共 | 2006年12月 | 第26回日本看護科学学会学術集会(神戸市) | 体圧分散マットレスにおける端坐位保持中の身体安定性について、動作解析と主観調査から検証した。その結果、端坐位保持中の身体安定性は枠無ウレタンマット、エアマットで悪いことが明らかとなり、体圧分散マットレス使用者で離床を促す場合には、枠有ウレタンマットの選択やクッションや柵などで身体を固定するなどの対策が必要であると考えられた。 本人担当部分：データ収集補助 発表者名：岡みゆき、阿曾洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵、高田(岩崎)幸恵、前田知穂、矢野祐美子 |
| 15. 健康若年者におけるベッド上での坐位への姿勢変化がもたらす脳活動 脳波、大脳局所Hb、心電図分析より | 共 | 2006年12月 | 第26回日本看護科学学会学術集会(神戸市) | 健康若年者を対象とし、仰臥位から坐位への姿勢変化が脳を活性化させるケアとして有効かどうかを検証した。その結果、受動的なベッド上坐位姿勢での大脳と交感神経活動の活性化を確認できた。これより、坐位姿勢には生体を活性化させる作用があり、看護ケアとして使用できる可能性が示唆された。 本人担当部分：データ収集補助 発表者名：徳重あつ子、阿曾洋子、伊部亜希、片山恵、岡みゆき、前田知穂、高田(岩崎)幸恵、矢野祐美子 |
| 16. 高齢者クラブにおける世代間交流事業の実態調査 クラブ企画と事業評価・子どもへの印象との関連の検討 | 共 | 2006年12月 | 第26回日本看護科学学会学術集会(神戸市) | 高齢者クラブの世代間交流事業の実態を明らかにし、クラブ企画と子どもへの印象との関連を検討することを目的とし、調査を行った。クラブ企画の有がより低学年との交流割合が多く、子どもへの印象も肯定的であった結果から、積極的な世代間交流事業の普及が重要であることが示唆された。 本人担当部分：データ収集補助 発表者名：前田知穂、阿曾洋子、高田(岩崎)幸恵、岡みゆき、徳重あつ子、片山恵、伊部亜希 |
| 17. 高齢患者の清拭群とシャワー・入浴群との皮膚機能の比較からみた清潔ケア方法の有用性の検証 | 共 | 2006年12月 | 第26回日本看護科学学会学術集会(神戸市) | 高齢患者の清拭群とシャワー・入浴群について、入院時と1週間後の皮膚機能(角質水分量・経表皮水分喪失量・表皮pH)を比較し、看護ケアとしての清潔ケア方法の有用性を明らかにすることを目的とした。ケア群間における1週間後の皮膚機能の変化には大きな違いは見られず、看護ケアとしてともに有用であると考えられたが、更に他の要因や期間に関する検討が必要であることが明らかとなった。 本人担当部分：分析内容検討補助 発表者名：伊部亜希、阿曾洋子、宮嶋正子、岡みゆき、徳重あつ子、片山恵、前田知穂、高田(岩崎)幸恵 |
| 18. 生理学的指標から見たシムス位の身体的安楽性の検証 | 共 | 2006年12月 | 第26回日本看護科学学会学術集会(神戸市) | シムス位が身体的安楽性に問題がある体位かどうかを検証するため、健康成人女性を対象とし、仰臥位との比較を行った結果、副交感神経活性指標、ストレス指標、呼吸機能指標ともに両体位では有意差はみられなかった。このことから、シムス位の身体的安楽性は仰臥位と変わらないものであることと考えられた。 本人担当部分：データ収集補助 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|--|---------|------------------|----------------------------|---|
| 2. 学会発表 | | | | |
| 19. .3次元動作解析による体圧分散マットレス上での起き上がり動作の評価 | 共 | 2005年9月 | 第13回看護人間工学部会研究発表会（京都市） | 発表者名：片山恵、阿曾洋子、伊部亜希、宮嶋正子、徳重あつ子、岡みゆき、前田知穂、高田（岩崎）幸恵 体圧分散マットレスについて動きの観点から評価することを目的に、起き上がり動作時の生体負担についてデータを得た。標準マットレスに比較すると体圧分散マットレスは起き上がり時の肘の沈み込みが大きくなるが、肩腰のひねり角度や体幹屈曲角度には違いはみられなかった。これらのことから、筋負荷も考慮した起き上がり動作の分析が必要であることが明らかとなった。 本人担当部分：データ収集補助 |
| 20. 脳波からみた坐位姿勢援助の有効性に関する基礎的研究 —パイロットスタディー— | 共 | 2005年9月 | 第13回看護人間工学部会研究発表会（京都市） | 発表者名：岡みゆき、阿曾洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵、高田（岩崎）幸恵、前田知穂、矢野祐美子 ギャッジアップ坐位に着目し、健康成人を対象に、仰臥位から坐位への姿勢変化による脳活性を脳波で捉えることを試みた。仰臥位に比較し、30度坐位は違いはなかったが、80度坐位ではβ帯域、γ帯域の増加がみられ、主観調査でも覚醒度の高さを感じていた。これらより、脳活動を脳波で捉えることが可能であることが明らかとなった。 本人担当部分：データ収集補助 発表者名：徳重あつ子、阿曾洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵、高田（岩崎）幸恵、前田知穂、矢野祐美子 |
| 3. 総説 | | | | |
| 4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績 | | | | |
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| 6. 研究費の取得状況 | | | | |
| 1. 体型別褥瘡予防ケア開発の為の基礎的研究-肥満体型高齢者の褥瘡好発部位の検討- | 単 | 2013年6月から2016年3月 | 科学研究費補助金（若手B）課題番号：25862119 | 体型差を考慮した褥瘡予防ケア開発の為の基礎的研究として、肥満体型高齢者の褥瘡好発部位を明らかにする事を目的とし、健康女性及び、健康女性高齢者の仙骨部・臀部血流及び体圧測定を行った。助成金：160万円 本人担当部分：データ収集、分析 共同研究者：なし（研究代表者） |
| 学会及び社会における活動等 | | | | |
| 年月日 | | | | 事項 |
| | | | | |